

【少女】のハンドアウト

★前置き

ハンドアウト情報はボリュームがあります。

2, 5~7 頁の内容を読むだけで事件解決が可能です。

4 頁の内容は全て覚える必要はありません。読まなくても問題ないです。

目次 (全 8 頁)

1 頁：このページです。目次とキャラクターネームが記載されています。

2 頁：目的、行動指針、他人物との関係など、基本的な情報が載っています。

3 頁：キャラクターの容姿、持ち物に関する情報が載っています。

4 頁：今に至るまでの旅路情報です。4 頁の内容は事件には直接関係ないため、見なくても事件解決は可能です。
ただし、エンディング分岐に関する要素が含まれています。
目を通しておくと話の掘り下げもしやすくなるため、確認推奨です。

5~7 頁：事件直近の時系列が載っています。事件解決する為の詳細情報です。

8 頁：5~7 頁の時系列情報を簡潔にまとめたサマリです。5~7 頁より情報精度は低いです。



- 「私はここまで旅をしにやってきました。」 - フロリダから来ました

本名：ロシオ

年齢：17 歳

筆談の最後に入れる名前：フロリダから来ました

8 月 1 日の初期位置：古びた展望台

少女について

私は【父を捜しにここを訪れた。】数年前にフロリダの住まいから突然いなくなった父を捜しに1人で大陸を旅して、母は病気で既になくなっていく。

父に関する手がかりはここへ来る途中でいくつか掴めているが、行方がわからないのでまだ情報収集最中だ。父を捜してもう数年になるので、どこかを通りかかった父に筆談を気づいてもらいたい気持ちもあり、“フロリダから来ました”という変な筆談ネームにしている。

そうして父を捜した結果、最近セントラルシティに入ったわけだが、周辺地域に滞在している料理人、画家、吟遊詩人の人達にあった。父に関する明確な目撃証言はないが、この地方を歩き回っているだろうと、ほぼ確信している。

ああ、どこかにいる父を捜さなければ。このセントラルシティ周辺は居心地が良いのもう少しここで交流しながら手がかりを捜してみようと思っていた。しかし懸念事項があり、【誰かが私の名前を騙って筆談している。】なんでそんな事をしているのか。これでは皆混乱しちゃうよ。

更にこの状況下で街に2つの大火事が発生した。人為的な火事にしか見えなかった。誰かがこの街を破壊しようとしているのか。【犯人の陰謀を阻止して、平和なセントラルシティを取り戻す事に協力しよう。】最近風邪を引いてしまって鼻づまりを起こしているのであまり気乗りはしないが…

行動指針

- 1：父の行方を知ること。
- 2：自分の名を騙って筆談している人間にやめてもらうこと。
- 3：犯人の陰謀を阻止して、平和なセントラルシティを取り戻すことに協力する。

人物関係

吟遊詩人の印象：セントラルシティのいたるところに「吟遊詩人エウダモス」と筆談を残し、「自己主張の激しい人だな」と感じる。最近よく約束を取り付けられたりいちいち自画像を描いたり面倒くさいことこの上ない。詩さえ筆談していればいいのと思うところがある。セントラルシティに最近来た事はお互い様なところだけだね。どこかで会った事があるような気がする年上の男性。

画家の印象：セントラルシティ周辺に住む同年代くらいの男性。街のいたるところに絵画・落書きを残して性格面も年相応に感じる。料理人とはかなり仲が良く感じられる。吟遊詩人の事は本当に嫌いそうで、最初はなんでそんなに嫌うか理解できなかったけど自分も最近分かるようになってきたかもしれない。彼の名前は“リッキー”だろう。

料理人の印象：セントラルシティでレティシア・デ・モノポール80 という店を開いているすらっと背の高く金髪の年上の女性。食料面でいつもお世話になっているやさしい人。同じ女性だからなのか白ワンピースとブーツに理解がある。同年代だったら親友になれたかもしれない…年齢が離れているので今はやさしいお姉さんという印象。彼女の名前は店名からして“レティシア”だろう。

???の印象：よくわからない。セントラルシティで名無しの筆談をよく見かける。ここらを歩き回っている謎の人物がいる、という噂を聞いたが何者なのかは実際にあってみないとわからない。ただの旅人かもしれないし、おそらく父かもしれない説がある。

父：私が4歳だった時に突然フロリダからいなくなった。大陸の西側へ向かっていると思われる。髪は黒髪だったと記憶している。

母：私が13歳だった時に足の傷が理由で亡くなった。謎の遺言を残して死んでいった。

髪は黒髪。昔は別の大陸に住んでいたらしく、幼馴染が3人いたとの事だが今は離れ離れとのこと。

服職人：私がフロリダを出発した後に出会い、衣服面でお世話になった。

最近までセントラルシティに滞在していたらしい。年上の黒髪の女性。

★白のフェルトハット

(服職人からもらった。
服職人のサインが
入っている。)

★=ユドナリウム上でカード化されており、アイテムカードとして所持しています。

★は推理・進行に影響を及ぼす可能性があります。

赤い★マークである場合、ユドナリウム上で他人から見えているアイテムである事を表わします。アイテム名称の赤字部分のみが他プレイヤーが把握できるようになっています。

髪の色：
茶混じりの黒

瞳の色：黒

白のワンピース

(服職人からもらった。
スーツケースの中に色々な柄の
ワンピースが4着分入っている
ので、その日の気分によって違う
柄のワンピースを楽しんでいる。)

★黒色の手持ちカバン

(カバンの中がなぜか血まみれになっている。)

★ポラロイドカメラ

(行商人からもらった。)

★旅日誌・ペン

(行商人からもらった。)

★サバイバルナイフ

(主に護身用。気が付いたら血まみれに
なっていたが、心当たりがない。)

★ヒスイ石のオカリナ

(フロリダを旅立つ際、浜辺に落ちていた
物を拾った。)

青のキャリーケース

(手持ちカバンとは別に持っており、
こちらには着替えの服を入れている。)

黒のブーツ

(行商人からもらった。母が足の傷から発生した
感染症で死んだ経緯があるため、華やかさを捨てて
頑丈なものを履いている。)



セントラルシティまでの旅路（このページの情報は事件と関係ありません。）

- ・セントラルシティ設立前4年：フロリダの浜辺に父と母の3人で住んでいる。これより前の記憶はない。当時はまだ2歳だ。
- ・セントラルシティ設立前2年：ある日突然父親がいなくなる。3週間は泣き続けたかもしれない。
- ・セントラルシティ設立前1年：母親から世界について教えられる。幼かったのでよく理解できなかった。
- ・セントラルシティ設立後2年：母親と意見が合わない。母親からは「この年頃ではそうなる」と言われた。
- ・セントラルシティ設立後3年：母親と毎日喧嘩した。さすがに申し訳なく感じた
- ・セントラルシティ設立後4年：フロリダの浜辺に行商人が訪れた。ポラロイドカメラを譲ってもらった。これは凄い物だ。
- ・セントラルシティ設立後5年：吟遊詩人と音楽家がフロリダの浜辺にやってきて、素敵なお詩を何時間も詠ってくれた。ああ、世界にはこんな人達がいるんだな、と心から感動した。
- ・セントラルシティ設立後6年：魚とりをしているときに母が足に傷を負う。治療手段がわからなく症状が悪化していった。
- ・セントラルシティ設立後7年：魚とりの傷が命取りとなり、母は息を引き取る。最後に「実は・・・わた・・・」と言い遺した。その後、いなくなった父親を捜す旅に出た。フロリダの住まいを旅立つ前に浜辺に落ちていたヒスイ石のオカリナを拾う。
- ・セントラルシティ設立後8年：旧ヒューストンで服職人と出会う。白いワンピースとその着替え、キャリーケースと手持ちカバンを譲ってもらい、お世話になった。
- ・セントラルシティ設立後9年：旧テキサスで父親と思わしき手掛かりを見つける。
- ・セントラルシティ設立後10年：セントラルシティー-テキサス間で1人の男とすれ違ったと、猟師の男から証言をもらった。その男性は色黒であつたらしい。
- ・セントラルシティ設立後11年：セントラルシティに到着。滞在中に事件に巻き込まれる。

事件の数日前まで

下線のある文章 = 少女の台詞 を示します。

フォントの異なる文章 = 筆談を示します。(下線付きは自身が描いた内容)

色文字下線 = 他キャラクターを発見した事を示します。

7月1日 セントラルシティ入りする。

7月13日までの間 セントラルシティ周辺を歩き回って以下の出来事があった。

- 料理人、画家、吟遊詩人の3人分の筆談が直近にあった事を認識する。
- 画家**、**吟遊詩人**と対面して、今までの旅路の話など交流を行なった。
- 「人探しをしている」という事は重い話なので特に言わなかった。
- 吟遊詩人と話して、ここに来る前のどこかで吟遊詩人と会った事があるような気がした。

7月14日 古びた展望台で**料理人**と初対面して話をする。この時、料理人から2つの情報を聞いた。

- 「7月30日に新商品をレティシア・デ・モノポール80で販売するよ」と宣伝された。料理人が開いている店の名前だそうだ。
- 「8月4日にセントラルシティでライブが開催されるよ」と教えてもらったライブ開催の話聞いて、昔フロリダに来てくれた音楽家と吟遊詩人かな?と思った。

7月29日までの間 ●名前のない旅人の筆談があることを認識し、全身が暗い服で隠れてよくわからない旅人の目撃証言を画家から聞く事ができた。

7月29日夜 セントラルシティ内の様々な筆談を見て回ったが、やはり父に関する決定的な証拠は出て来なかった。次の土地へ調査しに行く事も考えたが吟遊詩人・料理人・画家と交流する事は楽しかったため、中々この街から出ようとも思えなかった。やっぱり他3人に対して「父を捜している」と打ち明けるべきか…

…やっぱりもう少し自分自身で考えてみよう。まだこの周辺で行っていないところもあるし、何か有益な情報が得られる可能性も残っている。鉱山街にある風呂に入らせてもらった後は、寝巻きに着替えて暖が取れそうな廃屋に入り横になった。

明日は星日和の砂漠、ベリーベリータワーと調査して…気分転換に見晴らし良いところで絶景を見てみたい。

事件発覚の2日前：7月30日朝

大雨の中、鉱山街の廃屋の中で目を覚ました。外を覗いてみると土砂降りだ。野宿に使った道具を廃屋の隅に戻し、スーツケースを傘代わりにしながら廃屋の外に出て、通りを歩いていく。今日の調査の続きは…ベリーベリータワーにしてみよう。まだあちらには行っていないし。いくつもの水たまりを踏みながら私は鉱山街を抜け出て砂漠の方へ向かった。それにしても…昨日の雨の影響で身体が冷えて、風邪を引いてしまったみたいだ…

砂漠をもくもくと歩き続けていると雨宿りできる岩石があり、ちょうどそこが掲示板になっていた。せっかくだし何か描いて行こうかな。「風邪ひいてしまったうえに砂漠の砂塵も重なって非常にむずむずするよ。早く治まらないかな…鼻がかゆくて辛い。」と今の気持ちを描いた。その後は再びタワーに向かって歩き出す。殺風景でつまらない光景だが、土砂降りだったから砂漠を通るのも少し楽だった。そういえばタワーが見えた辺りで**誰か**とすれ違った気がするが、もう姿は見えなくなっていた。風邪のせいなのかは知らないが気にする余裕がなかったかも。

しばらくするとベリーベリータワーのシルエットが大きく近づきほっと一息。ようやく休憩だ。黒い塔の壁にもたれかかり、雨除けとした。休憩がてら今までの筆談を見てみると「これが悪魔の塔だ」「これは車というやつか。」など、描いてある昔の筆談はほとんど意味がわからなかった。おまけに赤く塗りつぶされた落書きなんかもある。ひとつだけ、「ここは雨風しのげても気持ちが良い。変な落書きさえないきゃ」という筆談だけ共感できたので「↑**本当ね、ところでどこから来たの?**」と筆談を描いた。こう描いたのも父探しの調査の一環。

ひと休憩し終わった後はお腹が減ってきた。「そういえば朝ごはん食べてないなあ…」そうとなればセントラルシティにいる料理人さんに食事を貰いに行こう。タワーを出発し、西部ジャンクションと抜けて、セントラルシティの廃屋街を抜けていった。目指すは料理人の長い名前のあの店!

7月30日昼

通りを歩いて行くとレティシア・デ・モノポール'80にたどり着き、店前の掲示板に向かって**渋い表情の画家**が突っ立っていた。なんだか不機嫌そう。近づくと彼は私に気が付き、掲示板を見るように促された。なんだろう？確認してみると「少女の君、明日夜に古びた展望台で歌を歌いたい。ぜひ来てくれ。」吟遊詩人エウダモスと、吟遊詩人から待ち合わせの約束を受けていた。歌！？どんな歌だろう、この世界ではこのように勝手に約束を取り付けられたりするのだが、ライブを行う吟遊詩人の詩が早速聞けるなんて気になって仕方がない！

筆談を見た自分は、高揚した気分でお店に入って行った。画家の彼はまだ外に残っていて終始不満そうだった。いつもああいう感じのかな。店の入り口をくぐると、「いらっしゃいませ、新商品あるよ！」と**ドヤッとした料理人**がキッチンに立っていた。そういえば新商品の話があったな…！「じゃあそれを！」と即答。

私がテーブルに着いて手持ちカバンを地べたに置いている間に、料理人がこちらまでやってきて彼女は食器を置く。彼女が手に持つ開いた紙袋を傾げると、中から乾燥した何かの小粒がじゃんじゃら皿に零れ落ちて来た。これはなんだろう？見た事ないけど美味しそう。料理人に一礼して、それを口に入れたが…なんか物足りなかった。味がしない。…これ、味付け必要なんじゃない？名前を聞くとコーンフレークというらしい。

味気のない昼食を食べている間に画家が「掃除終わった！」と言いながら店に入ってきて私の隣に座った。彼の腕がさっき見た時より汚れているのを一瞬見て、画家はまくっていた袖を元に戻してカバンを地面に置いた。

一息ついた彼は私に今までの旅路の話などしてきた。私もその話にのるだろう。人とこうして話をするのは楽しいから。しばらく画家と話し合っている間、気が付くと料理人がいなくなっていた。どこに行ったのだろうか？

いなくなった料理人がどこにいるか周囲を見たところ、画家の蹴った土が私の服にあたって「汚しちゃったごめん」と彼は言う。それくらいじゃ汚れないよ。結局料理人は見つからず、画家もそのことには気が付いた様子だった。次に画家が唐突に「第16港湾都市へ散歩しに行かない？」と言ってきたが、第16港湾都市は無機質なガラクタの街だ。それより綺麗な景色がみたい…。「そこより今は他に好きたくて、古びた展望台に行かない？」と言うと、「おっけー」と即答をもらう。やった！今日はそこで寝ようかな…

行先が決まり支度をして店を出る。空はもう赤く染まって時間も遅い。展望台の景色はどんなに綺麗なんだろうな～ 凄いな～ そんな事を頭に浮かべながら、私は画家より先行して歩き第16港湾都市の方へ歩いて行った。

7月30日夕方

日没し、空が紫色に染まってくる時刻、画家と雑談しながら道中の第16港湾都市を歩いていた。周囲の廃墟を見て、昔どのような街だったか考えながら話していただろう。しばらくすると通りにある掲示板が見えたので、そのまま筆談を確認しようとしたが、掲示板の背後にある家の中に**誰かの気配**を感じた。その時私は反射的にカバンの中にあるサバイバルナイフを握りしめようとしただろう。立ちすくんでいると突然画家は港の方へ走って行き、私も置いて行かれない様にスーツケースとカバンを引きずりながら彼を追った。

7月30日夜

港湾都市でボートに乗った私たちは、展望台がある小島へ向かっていた。小島の岸にたどり着き展望台まで画家と歩いて行く。私は一応後ろから誰か来っていないか警戒していた。画家がいきなり立ち止まって彼の背中にぶつかる、彼は空を見上げた。私も釣られて空を見るとそれは満天の星空だった。凄く綺麗…こんな景色が見られるなんて…どこがより良い景色になりそうか、2人で展望台周りを歩き回った。

丘の上で立ち止まり対岸の夜景を眺める画家が絵になっていたのだから彼を写真に納めたくなくなった。1枚くらいいいよね？カバンから出したポラロイドカメラで彼の横顔が映る様に位置調整して、私は自撮りポーズをした。シャッターボタンに力を込めると突如辺り一面が白く光り輝き、「うわっ」と声を大にした。直後に「誰かいるのか!？」と男が叫ぶ声が聞こえてきた。それは吟遊詩人の声ではない、どこかで聞いた事のある男の声だった。

2人でとっさに茂みに隠れて観察していると**男の人影**が確認できて、右手に大きな武器を持っている様に見えた。私は身の危険を感じて、画家に「ここから逃げよう」と提案した。すぐ了承してくれたため2人で展望台を後にしてボートに乗り、第16港湾都市まで逃げた。

第16港湾都市戻ると画家とすっと別れた。疲れた…今日の午後は不審者との遭遇が連続だった。周囲を警戒しながら廃漁村まで行き、到着するとまずは掲示板を見た。そこには「誰か医者に関する情報を持っていたら教えて欲しい。私には必要な物だ。」6月16日という筆談があり、それを見て閃いた。これは私が追っている人の筆記に近い…！「6月16日のあなたもしかしてフロリダから来た？↑私の事がわかります？今17歳になりました。私の事が分かれば、ぜひどこかでゆっくりお話してあげませんか。」と筆談を描いた。この人は筆談を返してくれるかな…その後は廃屋に入り横になった。今日はここで野宿しよう。

事件発覚の1日前:7月31日朝

廃漁村の廃屋で気持ちよく寝ていたところ。廃屋の戸が突然「ガタン」と大きな音を立てた。その音で目が覚め、さらに「うわっ」という男の声が聞こえた。そして直後に人が走り去って行く音が聞こえた。とっさにサバイバルナイフを握りしめ立ち上がって外の様子を確認するが、すでに誰もいなかった。男の声が短かったため、誰の声か判別できなかった。今のは吟遊詩人？画家？

そこに誰がいたのかは気になるが、一件落ち着いたためナイフを手持ちカバンにしまおうとした時、ナイフに血糊がべっとりついているのに気が付いた。あれ？なにこれ…全く記憶にない。直感的に本物の血だと感じた。

私は赤く染まったサバイバルナイフを手にして周囲を警戒しながら廃漁村を出た。本当は着替えがしたかったけど周囲に不審人物がいるかもしれないので今日は我慢しよう…それにしても風邪が治まらず体調が悪い。

7月31日昼

ナイフを赤く染まった手で持ちながら第16港湾都市の通りを警戒しながら歩いていた。するとセントラルシティの方面から眠そうな画家がやってきた。早速気になっている事から、「さっき廃漁村に来た？」と彼に尋ねると「行っていない」と即答される。この時彼がにこにこ笑っていたのが気になったが質問せず「そっか」と言って話を終わらせた。何か情報は得られないかと、近くにあった掲示板を見ると、

「吟遊詩人さん。3日後の昼、ここで逢いましょう」70リダから来ました。7月30日夕方という筆談を見かけた。なにこれ？私はこんな事を描いた覚えはない…誰かが騙っている？
「↑これ私じゃないです。誰かが名前を騙っています」70リダから来ました。

と、訂正する筆談を残した。…まったく誰が。掲示板から目を離す際「ここに色々葉がある」という筆談を目撃。ここってどこ？捜してみたいが…お腹はペコペコだし吟遊詩人と待ち合わせの約束はしているし、明日でいいや。その後セントラルシティへ1人で向かった。手についている血は勘違いされそうなので海の水で洗い流した。

7月31日夕方

セントラルシティに着くころには空は暗くなり雨が降って来た。ずぶ濡れになりながら料理人の店にたどり着き、「誰かいるかな？」と一言。入り口をくぐるとすぐ目の前に料理人が立っていた。「いた！」と私が言葉を発すると、料理人が「雨が強いからお店の屋根より向かいの廃墟の方がしのげるよ」と言い、いきなり保存食の袋を差し出された。雨漏りでもしているのかな？「そうなんだ、ありがとう！」と私はお礼を言い、向かいの廃墟へ行った。

料理人に案内された向かいの廃墟だったが雨粒が筒抜けになり一息つけなかった。ここは本当にしのげるの…？また店に戻ろうとしたが、料理人が店内で屋根の雨漏りにあたふたしている状況だった。やっぱり別のところに行くかな…以前西部ジャンクションで見た家屋の方が雨をしのげそうなので、あっちの方へ行ってみよう。雨にあたりながらセントラルシティを後にした。へっくしゅん！ううっ風邪薬が欲しい…

7月31日夜～深夜未明

西部ジャンクションへたどり着いた。まだバランスが保たれているハイウェイの高架下なら雨が防げるだろう。その方向へと向かっていたが、途中で全身を黒い外套で隠した旅人とすれ違った。私が何か反応する前に、その旅人は私の方を一目見てきた直後、全速力で私から逃げていった。どうしたの？旅人が途中バケツにつまずき転んで痛そうにしていたが、すぐ立ち上がりまた逃げた。一体なんだったんだ…何か誤解があっては困るので、以下筆談を描いた。「今すれ違った方がすごい勢いで逃げて行ったんだけど、逃げることはないのに。何があったの？」

その後道中で夜ご飯を済ませ、吟遊詩人の待つ古びた展望台・サマーリゾート付近へ行ったが誰もいない。何時間待っても吟遊詩人は来なかった。…忘れ去られている？でも誰かが今日ここを訪れたような跡がある。昨日訪れた時より足跡が多かったからだ。やがて眠くなかったので置いたスーツケースとカバンの横で就寝しようとするが…

…寝れない、中々寝付くことができない。夜中に目を覚ました。ああ…しんどい。やっぱり風邪を早く治さないと…そういえば第16港湾都市に葉があると書き込まれた筆談がある事を思い出し、カバンを持って雨にうたれながら第16港湾都市まで移動した。港湾都市の掲示板の裏の家に誰かがいた記憶がしたので、あそこに葉があるのかな？と目星をつけて家の中を捜しまわるとかなり物色された形跡があった。

やっぱりここには誰か来ていたのか…ガラクタの中を捜すと風邪薬らしき瓶を見つけた！やったー！！瓶を開け中の錠剤を飲んだ。いや、錠剤飲めないんだよ。仕方なく錠剤をかみ砕くと苦すぎ、うえっ、うえっ…夜遅いし荷物は展望台に置いてきたので砕けた薬を喉奥で舐めながら展望台へ戻った。不味い。展望台へ戻るとすぐに就寝した。

8月1日朝

夜が明けると、廃漁村と星日和の砂漠の方角から、大きな煙が上がっているのが確認できた。目覚めた時には身体は怠く風邪は治ってなかった。だめじゃん。それでも私はカバンを手に取り、今起きている事態に立ち向かう。

行動サマリ

※このサマリは4, 5頁の時系列を簡潔にまとめている内容です。
正確な情報・より詳しい情報は4, 5頁の方を確認ください。



時間	できごと	認識した人 ★互いに認識している ●見ただけ・聞いただけ
7月30日 朝1	鉦山街で目覚める。野宿道具を片付けて砂漠の方角へ出発する。どうやら風邪を引いてしまったようだ。	-
30朝2	タワーの近くで誰かとすれ違った。その後タワー下で雨宿り。	★不明
30昼	① セントラルシティに到着。料理人の店前に画家が立っていた。その後、吟遊詩人から待ち合わせのお誘いをされている事を知った。 ② 料理人のお店に入り、昼食をもらう。その後料理人はどこかへ出かけた ③ 画家と話している間、画家が私の後ろにある物を取ろうとした。その後、画家と2人で古びた展望台へ行く事にした。	★画家 ★画家・★料理人 ★画家
30夕	画家と一緒にセントラルシティを出発して第16港湾都市を通り過ぎる。掲示板の裏にある廃屋の中から物音が聞こえたので見ると誰かがいた	★画家・●不明
30夜1	① 古びた展望台まで行き画家と一緒に夜景を見た。対岸を眺める画家の横顔を思わず1枚撮ろうとしたら辺りが光り輝いた。 ② その時にびっくりした声で、サマーリゾートの方角から吟遊詩人ではない男が「誰かいるのか!？」と叫んできたため、古い展望台から逃げた。	★画家 ★画家・ ★吟遊詩人ではない男
30夜2	画家と一緒に第16港湾都市まで戻り、その後別れた。	★画家
30夜3	廃漁村の廃屋の中で父への思いを綴りながら夜を明かした。	-
31朝	① 廃屋の中で寝ていたところ、廃屋の戸が突然ガタンと大きな音を立てた。音で目覚めて「うわっ」という男の声が聞こえた。 ② サバイバルナイフを握りしめて外に出るが、既に誰もいなかった。 ③ ナイフをかばんに戻すところ、ナイフに血糊がべっとりと付いていることに気が付いた。直感的に本物の血だと感じた。	★男 - -
31昼	① サバイバルナイフを持ったまま第16港湾都市まで行くと画家と遭遇した。その時に画家と会話をした。画家は笑いながら会話していた。 ② 掲示板を眺めてみると、見覚えのない自分名義の筆談約束があった。また、ここに色々薬がある。という筆談も目撃した。 ③ その後セントラルシティへ向かった。道中で手に付いた血は洗い流した。	★画家 - -
31夕	① セントラルシティに行き料理人の店へ行くと料理人がいた。料理人は料理を出した後、屋根が雨漏りしているので違う場所を案内してくれた。 ② 雨がつよすぎてあんまり防げなかった。料理人の店へ戻ろうとしたが料理人が屋根修理にあたっていたので自分は違うところへ行こう。	★料理人 ●料理人
31夜1	西部ジャンクションを通り過ぎる際、全身を黒い服で隠した旅人と遭遇した。私の方を一目見た後全速力で逃げられ、途中ズッコケていた。	★全身黒い服の人間
31夜2	古びた展望台へ行って数時間待つが吟遊詩人はやってこなかった。	-
31夜3	風邪のせいで寝付く事ができないので、第16港湾都市にある薬の筆談を思い出しそこまで移動。医者の家の中で風邪薬を見つけて噛み砕いて飲んだ。	-
31夜4	古びた展望台まで戻って就寝する。	-